SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

教養科目「歴史と文化」における一つの試み：毎回一冊の書籍について学ぶ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2018-01-17 キーワード (Ja): 歴史, 文化, 日本史, 世界史, 歴史教育, 歴史と文学 キーワード (En): 作成者: 三ツ谷, 三善 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024407

教養科目「歴史と文化」における一つの試み
—毎回一冊の書籍について学ぶ—

三ッ谷三善*

An Experiment on General Studies ‘History and Culture’
-Consecutively Utilizing a Book for Classroom Learning-

Mitsuyoshi MITSUYA

平成 28 年度の後期の教養科目「歴史と文化」の授業の実践報告である。毎回異なる１冊の書籍を通して、日本及び世界の歴史と文化を学ぶ授業の方式について、各回の学生のコメントペーパーと授業後の学生による授業アンケート調査を用いて分析した。毎回読み切りの形なので受講しやすく、新しい知識を身に付けたとする学生が多かったのは成果であるが、高校での日本史未履修者の存在を踏まえた授業内容、扱う時代や地域等に課題があることが明らかになった。

キーワード　歴史、文化　日本史　世界史、歴史教育，歴史と文学

１．　実施計画

１－１．　授業の目標

日本及びヨーロッパの「歴史と文化」の特質を探ると共に、新しい世界史を構想する見識を養う。

１－２．　学習内容

日本の歴史と文化について、毎回一冊の書籍を取り上げ、古代から近現代にわたり、様々な視点から学習する。言わば「90 分で名著」である。併せて、ヨーロッパの歴史と文化について学習し、新しい世界史の在り方を考える。

１－３．　授業計画

授業の実施計画は次の表の通りである。

表１　授業で取り上げた書籍

回	書　籍
1	ガイダンス・河合隼雄『中空構造日本の深層』（中央公論新社）
2	上山春平『埋もれた巨像　国家論の試み』（岩波書店）
3	梅原猛『隠された十字架　—法隆寺論—』（新潮社）
4	網野善彦『中世再考　列島の地域と社会』（日本エディタースクール出版部）
5	黒田日出男『増補　絵画史料で歴史を読む』（筑摩書房）
6	今谷明『室町の王権』（中央公論新社）
7	笠谷和比古『士（サムライ）の思想　日本型組織と個人の自立』（岩波書店）
8	長谷川宏『日本精神史　下』（講談社）
9	中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』（岩波書店）
10	保阪正康『昭和史のかたち』（岩波書店）
11	松本建一『司馬遼太郎が発見した日本　『街道をゆく』を読み解く』（朝日新聞出版）
12	塩野七生『痛快！ローマ学』（集英社インターナショナル）
13	阿部謹也『中世の窓から』（朝日新聞社）
14	木村商三郎『ヨーロッパ思索紀行』（日本放送出版協会）
15	羽田正『新しい世界史へ　—地球市民のための構想』（岩波書店）・まとめ

＜注＞第８回の「『日本精神史』は、古代から近世に至る論集であるが、下巻の第三十一章「元禄文化の遊戯とさびと人情—西鶴・芭蕉・近松」を取り上げた。

１－４．　成績評価

毎回の出席状況やコメントペーパー（15×３＝45 点）及び授業で取り上げた書籍に関するレポート（55 点）で評価する。

２．　実施状況

以下、授業の実施状況についてまとめた。授業では、当該書籍の全ての内容を取り扱うことはできないので、中核的部分等を抜き出し、資料としてまとめたプリントを提示した。また、その内容をパワーポイントによるシートに編集し、プレゼン資料とした。授業の最後の数分で、コメントペーパーに記入させた。毎回、主なコメントを A４判（表裏）1 枚にまとめるとともに、最も充実した内容のものを「ベストアンサー」として掲げた。このコメントペーパーのまとめを次時の最初に配布し、若干のフィードバックを行った。

ここでは、日本の古代から第３回、中世から第５回、近世から第８回、近現代から第９回、ヨーロッパ史から第 12 回、総括として第 15 回のそれぞれの内容について記した。これらは、本授業で各時代等の核と位置付けた回である。

２－１．　各回の内容

２－１－１．　第３回（10 月 18 日　出席者 77 名）

*静岡大学教職大学院

取り上げた書籍は、梅原猛『隠された十字架　―法隆寺論―』（新潮社）。

ア　授業の概要

はじめに、梅原氏の考える法隆寺の 7 つの謎についておさえた。

第 1 に、法隆寺の建造に関して、『日本書紀』、『続日本紀』に一言も書かれていない。

第２に、法隆寺に残る財産目録『資材帳』も消失と再建について沈黙している。

第３に、中門の真ん中に柱があるのは全くおかしい。なぜ通るのに邪魔になる通せん棒をたてたのか。

第４に、なぜ金堂に３体の如来がいるのか。仏像は古風だが、壁画が新しいのはなぜか。

第５に、塔の北隅の柱の下の礎石から発見された火葬人骨は誰のものか　等。

第６に、なぜ東院伽藍を必要としたか。夢殿の本尊、救世観音像はなぜ秘仏にされなければならなかったのか。

第７に、舎利を聖徳太子と関連させて、一緒に供養しなければならないのはなぜか。聖霊会に関する謎である。

次に解決への手がかりを探り、なぜ法隆寺が再建されたか、また誰が再建したかを推測した。日本では個人で神になるのは、ほとんど不幸な死に方をした人であり、聖徳太子は神となる条件を備えていた。法隆寺は一族絶滅という悲劇を背負った聖徳太子の霊を慰める鎮魂の寺である。再建は、聖徳太子ゆかりの人々ではなく、聖徳太子も血縁上、関係の深い蘇我氏から政治の実権を奪った藤原氏であることを、多くの財宝の寄進者として法隆寺にしきりに出没する橘三千代（藤原不比等の妻）を通して明らかにした。

その上で、第４及び第６の謎の解明について扱った。金堂の出入り口の扉のぜいたくな一枚板から、金堂は壁画の制作を予想してつくられたこと、また壁画については、梅原氏は寄進者を橘三千代とする説に触れ、三千代が実権を握った宮中で、印度式の官能的な美術を好んだ影響ととらえた。

聖徳太子の等身大の像と考えられていた、夢殿の救世観音像は、光背が直接大きな釘で、仏像の頭の真後ろに打ち付けられている。これは藤原氏にたたりをなす聖徳太子の怨霊を封じるためとした。

イ　コメントペーパーから

①中学校や高校での日本史では、こうした一つの事柄について掘り下げた話がなされることはなかったので、新鮮で面白かった。今回は分かりやすく、面白い内容だった。

②授業の全体的な感じだが、用語とか内容が難しく、何となくしか分からなかった。歴史における一般常識が無に近いので、なかなか頭に入ってこなかった。

③歴史の授業では事実を整理するだけなので、こういう推理ものは、今までの歴史の学習とは少し違い、面白かった。

④聖徳太子と蘇我氏をしっかり認識することで、大化の改新前後の藤原氏へ実験が移る様子が、より分かりやすくなった。中高の時からこの見方を学べていれば、より歴史を理解できたのにと思った。藤原氏が行った摂関政治のような、皇族に嫁がせて実権を握っていくやり方を、既に蘇我氏が行っていたのは、今日初めて知ったので、とても驚いた。

⑤法隆寺の再建についても、また藤原氏が関わっていたことが分かり、非常に驚いた。藤原不比等は、本当に古代国家を作り出した、隠れた大政治家だと感じた。

⑥修学旅行で法隆寺に行ったときに、門から入らず、塀（回廊）の端から入ったことを思い出して、当時はただ言われたとおりに進んでいたが、今考えると、門があるのに門から入らないのは変だと思った。また、その理由を聞いて、なるほどと思った。

⑦救世観音像の釘については、技術的に必要だったととることも可能で、ややオカルトに走っているとも感じるが、授業はとても楽しかった。

⑧私は、世界史、日本史の知識があまりないので、授業のことを理解するのは大変だけれど、毎回授業の初めに配布するコメントペーパーのまとめで、他の受講者の見解を知れて理解が深まるので、これからも続けて欲しい。

ウ　ベストアンサー

聖徳太子について、教科書に書かれている以上のことを考えたことがなかったので、新鮮な気持ちで授業を受けていた。法隆寺について疑問点を挙げ、それを聖徳太子の霊を慰めようとする意図があったことによって説明されると、納得できる部分が多かった。特に「一個人を神として祭る」当時の日本人の考え方を、菅原道真や後醍醐天皇等の実例を挙げて説明した部分に興味を引かれた。藤原氏が実験を強めていく中、当時の人々は物事をどのように捉え、どのように対処していったのかを考える機会になったと思う。前回の授業に続き、話の中核に深く関わってくるのは藤原氏であった。古代の日本における藤原氏の影響力の大きさを知った。

エ　分析

①のコメントにあるように、教養科目とはいえ、高校までとの差異化を図り、掘り下げた内容を扱う必要がある。但し、②のコメントが示しているように、難易度には考慮しなければならない。本授業の受講生は、教育学部、理学部、農学部の学生であるが、理学部及び農学部の学生は、高校時代、世界史は履修したが日本史は履修していない者が多い事実に留意しなければならない。

③のコメントは、歴史を暗記科目と捉える見方と通じるものである。歴史を学ぶ面白さを感じさせる授業

となるよう、学習素材を選ばなければならない。

本授業は、毎回読み切りで、一回ずつ内容は完結するものであるが、１～３回を通して、７・８世紀の日本の古代国家において藤原氏の果たした役割に注目した。つまり、第 1 回の『中空構造日本の深層』では、天皇制を中空構造という視点から考察し、天皇は中心に存在するが、それ自身は力を持たないことを押さえた。第２回の『埋もれた巨像』では、律令国家形成期において藤原不比等が行ったと考えられる数々の事業に着目した。④・⑤のコメントやベストアンサーは本授業の 1～３回までの意図を押さえた内容となっている。

⑦のように、冷静で批判的なコメントが寄せられたことは頼もしい。

⑧のコメントに記されているとおり、コメントペーパーは協同的な学びのツールとして有効である。学生の同ペーパーへの関心は高く、授業開始前から、当日の資料と併せて、自主的に取りに来て、読んでいる学生が、授業の回を追う毎に多くなった。

第３回は教育実習と重なり、欠席者が多かったが、コメントペーパーの内容を見て『隠された十字架』に興味を覚えた学生が何名か見られた。第 4 回の授業のコメントペーパーに、「この前の授業のコメントをまとめたプリントを見て、私は公欠をしたが、是非聞きたい内容だったと思った。機会があったら、聞かせて欲しい」と記されていたので、11 月 10 日に同じ内容の授業を特別に行うことにした。当日は４名の学生が参加した。

２－１－２．　第５回（11 月１日　出席者 87 名）

古代の授業では、３回いずれも、歴史研究者ではなく、心理学者や哲学者の著作を取り上げたが、中世の 3 回はいずれも歴史研究者の著作である。

第５回は黒田日出男『増補　絵画史料で歴史を読む』（筑摩書房）。

ア　授業の概要

近年、活発化している肖像画研究により、美術史や日本史で多くの研究成果が生まれている。今日、紹介するのは京都の神護寺に伝来した伝源頼朝像、伝平重盛像、伝藤原光能像についての検討である。これらは、平安末期から鎌倉初期の制作とされてきた。

この神護寺三像は「名無し」であるが、三像が伝源頼朝像、伝平重盛像、伝藤原光能像とされたのは、南北朝時代のはじめ頃に作られたとされる『神護寺略記』の記述による。しかし、神護寺三像と『神護寺略記』の記述は、整合性のある関連づけはできない。

米倉迪夫氏は、伝平重盛像と伝源頼朝像を、康永四年（一三四五）年四月二十三日付けの足利直義願文（足利直義は、兄と自分の肖像画を描かせて、願文とともに足利氏所縁の神護寺に安置した）と関連付け、南北朝時代前半に制作された肖像画とした。また、両肖像画の像主名も変更し、伝平重盛像を足利尊氏像とし、伝源頼朝像を足利直義像とした。

黒田氏は、肖像画の表現を分析した有職故実の研究者や美術史家の研究を援用しつつ、米倉説を支持している。三人は、服装や身に付けた太刀から、四位以上の公卿で武官と考えられる。冠、簪、太刀から南北朝時代の制作とみるのが自然であり、太刀の俵鋲のかたちが桐文（足利氏の紋）と推測されることから、二つの肖像画の主が、足利尊氏、足利直義である可能性が高いとした。

三番目の伝藤原光能像は、米倉説・黒田説では、足利尊氏の子義詮（二代将軍）としている。米倉氏は、等持院にある足利義詮像と伝藤原光能像があまりにもよく似ていることを根拠としている。黒田氏の根拠は次のとおりである。神護寺三像は、同一構造の絵絹に描かれた、セット性の明瞭な肖像画である。伝平重盛像（足利尊氏像）と伝源頼朝像（足利直義像）が対の肖像と判断される。足利直義は兄と自分の両頭政治の維持という意図のもとに、願文と肖像画を神護寺に奉納。伝藤原光能像は、伝平重盛像（足利尊氏像）と構図と表現が瓜二つ。伝藤原光能像は、伝平重盛像の代わりに、伝源頼朝像（足利直義像）との新たな対となるべく制作された。観応の擾乱の中、二党政治の新たな相棒は、足利義詮しかいない。伝藤原光能像は、大変若々しく、二十歳台前半とみられる。足利義詮はそうした年齢で公卿になり武官になった。

伝平重盛像（足利尊氏像）が折りたたまれたのは、新たな対の成立によって、ご用済みになったからと考えられる。

イ　コメントペーパーから

⑨絵画史料を研究することで、歴史に関する様々なことがわかることに驚いた。政治や文化や人間関係など、様々な事柄に影響されて肖像画が制作されていることが分かった。このような肖像画を史料として見て、歴史を学習することは初めてだったが、このような観点で歴史をひもといていくことは楽しかった。

⑩源頼朝の絵を見せ、足利直義説を紹介するという授業の導入に引き込まれた。導入で絵を見せたりすることで、興味を持たせることができると、改めて感じた。

⑪今回の授業は、7 月の日本史の集中講義で少しだけ聴いたことがあったが、その時は、肖像画の特徴から読み解いた内容であった。垂れ目やまゆの感じなどから、尊氏・直義・義詮ではないかという話を聞いて、鳥肌が立ったのを覚えている。今回は文書中心から証明する内容であり、今まで聞いた内容よりも詳しい内容で面白かった。

⑫今まで当たり前と考えていた定説と呼ばれるものは、必ずしも真実ではない。そこをあらゆる視点から、あらゆる史料から事実を確認し、真実を考えていく、新しい歴史が分かったときの喜びを少し感じることができた。

⑬今回のような歴史の定説がくつがえされ、新説が正

しいとされるときは、どのような基準で決められているのか疑問に感じた。定説も新説も決定的な事実がない場合、教科書にはどのような内容が載るのか。
⑭平重盛像に折り目がある理由はこじつけっぽいと思った。（多数）
⑮源頼朝と足利直義の性格、足利尊氏と源義経の性格や役割が似ているように感じた。前者は、きっちり職務をこなすしっかり者で、後者は部下に親しく人気がある人柄である。幕府という大きな組織を動かすには、そうした二面性が大事なのかと思った。
⑯定説を疑う姿勢は学問として当然であるが、私は米倉・黒田説もまた疑わしいと思う。自分自身、科学の論証に慣れ親しんでいるせいか、「構図や表現が瓜二つ」、「足利直義の対と考えられるから」では根拠が薄い気がする。

ウ　ベストアンサー

まず今まで自分が源頼朝や平重盛と認識していた肖像画が、実際には全く別人の肖像画であるという異論を知り、かなり衝撃を受けた。初めは、長い間歴史を学ぶ際に目にし、教科書にも載っていたのだから、あり得ないと受け入れなかった。しかし，描かれている人物の顔の特徴、服装、装飾品、制作時期などから、定説を支持する根拠が崩され、異論を支持する根拠が浮かび上がってきた。この過程は、ミステリー小説などで証拠から犯人を捜し当てるような感覚に似ていて面白かった。今回の定説をくつがえす様子を見て、自分の得意とする分野や専門とする分野において、知識を身に付けたのであれば、定説を疑うことも時に必要であると感じた。最後に、肖像画にその人の性格が現れているかどうかという議論があったが、私は現れていると思う。

エ　分析

⑨のコメントに示されているとおり、歴史研究の資料として、絵画の価値を認識しておくことは重要である。次期学習指導要領においても、社会の第 6 学年の「３　内容の取扱い」で「年表や絵画など資料の特性に留意した読み取り方についても指導すること。」とされている。

⑩は、授業における導入の大切さを考えさせるコメントである。本時は何を学ぶかの明示が重要である。

⑪は、教育学部の社会科専修の学生から寄せられたものであるが、学部の専門科目でも同一テーマが扱われたということであり、当該テーマについて多角的な学習ができ、理解が深まったことと思われる。

⑫は、第３回の授業と同じく、本時でも真実を探究する過程を追う学習を通して、新しい知見を発見した喜びについて述べている。そこに歴史を学ぶ醍醐味があると思うが、それは、広く言えば真実を追究する、全ての学問研究に通じることである。ベストアンサーもそのことを述べている。

⑬の指摘は、重要な課題を提起している。現時点では、米倉・黒田説によって、教科書の記述が変わったということはない。

「伝源頼朝像」をはじめとする神護寺三像等の教科書における掲載状況は、次のとおりである。

表２　小学校社会科（平成 27～30 年度使用）

出版社	掲載状況
東京書籍	掲載の源頼朝像は、所蔵先の明示はないが東京国立博物館所蔵のものである。
教育出版	同上。
光村図書	同上。
日本文教出版	同上。

表３　中学校社会科歴史分野（平成 28～31 年度使用）

出版社	掲載状況
自由社	「源頼朝と伝えられている肖像画」として神護寺蔵を掲載。 足利尊氏像は、等持院蔵を掲載。
育鵬社	「源頼朝と伝えられる肖像画」として神護寺蔵を掲載。 足利尊氏像は、等持院蔵を掲載。
東京書籍	同上。
教育出版	「源頼朝と伝えられる肖像画（神護寺蔵）」と頼朝の像（甲斐善光寺蔵）を左右に掲載。 足利尊氏像は、等持院蔵を掲載。
学び舎	源頼朝像は、甲斐善光寺蔵を掲載。 足利尊氏像は、浄土寺蔵を掲載。
清水書院	源頼朝像は、甲斐善光寺蔵を掲載。
帝国書院	「鎌倉時代につくられたことが確実な、唯一の源頼朝像」として、甲斐善光寺蔵を掲載。 足利尊氏像は、等持院蔵を掲載。
日本文教出版	「伝源頼朝木像」として、善光寺蔵を掲載。

表４　高校日本史Ｂ（平成 29 年度使用）

出版社	掲載状況
東京書籍	「源頼朝像」は、所蔵先の明示はないが、東京国立博物館所蔵を掲載。 「足利尊氏像」を掲げているが、所蔵先の明示はない。
実教出版（３０４）	「足利尊氏木像（等持院蔵）」を掲載。
実教出版（３０５）	「源頼朝像（山梨　善光寺蔵）」を掲載。
清水書院	「源頼朝像（甲斐善光寺蔵）」を掲載。
山川出版社（３０９）	掲載なし。
山川出版社（３０７）	「伝平重盛像（神護寺蔵）」を掲載。
山川出版社（３０８）	「伝源頼朝像（神護寺蔵）」を掲載。
山川出版社（３０１）	掲載なし。

人物論も歴史を学ぶ醍醐味の一つであるが、⑮のコメントは、組織の中で、このコンビがそれぞれ果たす役割に着目しており、興味深い。

⑭・⑯のコメントにあるように、疑いのまなざしをもって研究を進め、確固たる根拠を挙げて、真実に迫ることの大切さを伝えていきたい。

中世の４～６回の授業は、各回でテーマは異なるが、南北朝・室町時代を取り扱った研究所の学習となった。学生にとっては、なじみの薄い時代であるが、第４回の網野善彦『中世再考　列島の地域と社会』で触れたとおり、南北朝時代を日本史の一大画期とする説もあることから、この時代に焦点を当てた授業は意義あることと考える。

２－１－３．　第８回（11 月 22 日　出席者 89 名）

取り上げた書籍は、長谷川宏『日本精神史　下』（講談社）。その中の第三十一章「元禄文化の遊戯とさびと人情　―西鶴・芭蕉・近松」。

ア　授業の概要

井原西鶴の浮世草子の処女作『好色一代男』では、主人公世之介の好色遍歴が、性の欲望と喜びがユーモラスな笑いの内に肯定されている。一方、その後の『好色一代女』では、おおらかな笑いとともに生を肯定する姿勢は後退し、生の現実をリアルに表現し、恋の悲劇を描いている。

町人物の『日本永代蔵』は、冒頭の言葉「金銭は両親とは別の命の親」が示すように、人の物欲・金銭欲や経済的な営みを人間的・社会的に価値あるものとする思想で貫かれている。『日本永代蔵』は家業が久しく繁栄する町家の例を集めているが、『世間胸算用』は金銭上のいざこざが集中的に現れる大晦日の一日に焦点を合わせて、町人の生活を活写している。

松尾芭蕉は、洒落た遊びや粋な社交としてたしなむ俳諧に不満を抱き、安楽な都市生活とはほど遠い草庵（芭蕉庵）において、新しい俳諧の創造に着手した。未踏の句境を追究した芭蕉は、草庵の生活とともに、不安で不如意の旅という境涯に身を置き、自分の感性を突き詰めた。『野ざらし紀行』の旅では、わずか十七文字を連ねただけの表現でまとまりのある一つの世界を創造した。『笈の小文』では、俳諧を風雅という概念で捉えている。大自然の四季や花や月、大自然に包まれた人間や人事だけでなく、大自然そのものの奥深いありさまを的確な言葉にまとめた。

最後の長旅となった『奥の細道』の旅では、俳諧一筋の芭蕉の活動の特色がうかがわれる。一つは、一度作った俳句を納得のいくまで推敲するという執拗さとともに、作品が完成した後は、それを超える新しい境地を目指す。もう一つは、仲間との共同性に深く根ざした活動ということである。孤独に通じる「さび」の境地にも、共同への思いが付いていた。

近松門左衛門は竹本義太夫（人形浄瑠璃）、初代坂田藤十郎（歌舞伎）と組んで、人間性豊かな舞台を創造した。歌舞伎より浄瑠璃の方に、時代浄瑠璃より世話浄瑠璃の方に近松の本領があった。

『曽根崎心中』は、心中する男女―平野屋の手代徳兵衛と天満屋の遊女お初―を主人公とする物語である。世間の常識に反する恋であり、幸せをもたらしそうにない恋だが、恋する二人が人情の純粋さを貫けば、価値ある二人の共同世界が生まれる。死によってもその価値は否定されないという恋愛観である。

『心中天の網島』は、『曽根崎心中』に比べ、文学的成熟度が格段に増している。主人公は紙屋を営む治兵衛と新地の遊女小春だが、話の展開の中で、治兵衛の女房おさんが重要な役割を果たす。『曽根崎心中』のお初は世間に背を向け、心中へと向かえば良かった。それが純粋な恋に生きることだった。一方、『心中天の網島』の心中にはそういう透明感がない。小春とおさんの間に創り出された義理（信頼）の関係が、純粋な恋心の成立を妨げる。小春にとっては、義理（信頼）も大事だし、人情（恋心）も大事で、二つを共に生かす道が見つからない。近松はそういう境地に小春を追い込んでいる。恋と世俗のしがらみ（義理）との対立とは全く違う矛盾の構図が提示されている。

イ　コメントペーパーから

⑰国語科の授業の中で、今日の授業に似たようなものをやったことがあったので、興味をより持てて楽しかった。日本の文学作品はどれも独特の世界観でありながら、美しいと思える作品ばかりで、読んでいて全くあきない。自分の好きな、興味のある分野だったからであるが、今日の授業は面白かった。

⑱井原西鶴の『好色一代男』や『好色一代女』、近松門左衛門の『曽根崎心中』や『心中天の網島』は日本史で題名だけは必死に覚えるためかなり知っていたが、内容を余り知らなかったので、新鮮であった。（多数）

⑲自分は理系で古典文学に対する知識も少なく、とっつきにくい内容で、あまり興味を引かれなかった。話の内容を整理するのが難しかった。

⑳文化史の授業では、元禄文化があって、誰々が何々を作りましたというふうにしか教わらないが、こうして作風を詳しく見ていくと面白い。元々興味はあったが、日本史や世界史の教科書に出てくる文化史に載っている文学を読んでみたくなった。

㉑芭蕉は後世に残る作品を直感で詠んだと思っていたが、一つの作品をより素晴らしいものにするために、推敲していたことにびっくりした。

㉒小春とおさんが男に依存せず、自立した潔い女性として描かれ、その絆を義理として表現したというのが新鮮だった。

㉓『心中天の網島』は、以前履修した「芸術論」でも取り上げられた作品で、内容については既に知っていたが、その時は日本音楽の観点でこの作品に触れており、今回文学的なアプローチを紹介していただいたこ

とで、この作品の理解がさらに深まった。恋愛を題材にした芸術作品は、今の時代にも十分共感できる部分が多く、私たちにとっては普遍的に受け入れやすい文化であることがよく分かった、
㉔江戸時代の文学作品を読むことで、この時代の人たちの考え方や感じ方が分かった気がした。

ウ　ベストアンサー

私は中学生の時に吹奏楽部に所属していて、「元禄」という吹奏楽曲を演奏したことがある。この曲は元禄時代の人々の生活や文化を表現したものであったが、当時の私は楽譜通りにただ演奏していた。今回の講義で元禄文化やその時代の生活について学ぶことができたので、いまなら具体的なイメージをもって、よりよい演奏ができると思った。近松門左衛門と人形浄瑠璃については、名前は耳にしたことがあったが、内容がこんなにも波瀾万丈なものだとは知らなかったため、かなり驚いた。文字だけで見ると、とても複雑で残酷なストーリーのように感じるが、人形劇で表現されるとまた違って、面白いものになるだろうと思い、実際に見てみたくなった。今回は歴史ではなく、文化中心の内容だったので、分かりやすく面白かった。

エ　分析

⑰は、国語教育専修の学生のコメントである。専門科目の学習とも重なり、興味を持てたということである。文化史は教科を横断する授業展開の可能性がある。⑱・⑳は、高校における文化史の扱いについて、問題を提起している。文化史の授業は文学や芸術（建築、絵画、工芸等）の学習事項の羅列になりがちで、授業者は頭を悩ませている。生徒もまた、知識を機械的に覚えるだけになりがちである。本時のように、文学作品を掘り下げて内容まで詳しく学習することで、各時代の文化の理解が促進されると考える。㉔のコメントもそのことを述べている。

ただし、⑲のコメントが示しているとおり、文学作品が苦手な学生もいるので、扱いには十分注意し、授業の構成は単純にし、説明は分かりやすくするなど、留意しなければならない。

㉑の驚きと関連し、一つの作品を文学世界として創造する営みは、虚構を形造ることでもあり、奥の細道の旅に随行した河合曽良の日記と照合すると、芭蕉の作品には事実と異なる部分もあることに触れたが、初めて知って驚いたという学生も見られた。

近松門左衛門の二つの世話浄瑠璃は、予想以上に反響があった。㉓のコメントにあるように、恋愛を題材にした作品であるだけに、学生にも共感できる部分があったのであろう。㉒のコメントは、『心中天の網島』は、男女の関係だけでなく、女性同士の信頼関係も大事にしており、その葛藤が物語に奥行きをもたらしていることを洞察している。

㉓のコメントは、専門科目「芸術論」で同じ素材を学習したことを述べている。本時は、音楽の観点ではなく、文学的な観点からの学習だったので、作品の理解がさらに深まったというものである。これも、授業者が知らない所で、教材のコラボがなされた例である。

なお、第６回の今谷明『室町の王権』の授業で、足利義満の王権簒奪計画を扱ったが、社会科専修の学生のコメントから、集中講義で同じテーマについて逆の立場から学んだことが分かった。

ベストアンサーは、元禄文化について具体的に学んだことが、音楽の演奏に役立つことを述べている。

２－１－４．　第９回（11 月 29 日　出席者 96 名）

取り上げた書籍は、中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』（岩波書店）。

ア　授業の概要

中村は司馬の史実に対する姿勢に疑問を呈し、『坂の上の雲』を事実と思ったら大間違いであるとした。中村の司馬批判は、二つの基準による。一つは、司馬が使った資料の誤読、過剰表現。もう一つはその後の歴史研究によって明らかになったことである。後者は司馬の責任ではない。前者については、『龍馬がゆく』の“禁門の変”の箇所に、御所周辺に 50000 人もの戦闘員が集結したとあるのは、文献から見てありえないという例を挙げ、『坂の上の雲』については、旅順港閉塞作戦で著名な広瀬武夫像に関して「明治後こんにちにいたるまで、広瀬ほどヨーロッパ婦人のあいだでいわゆるもてた男もいないかもしれない」との叙述を取り上げ、オーバーな表現と批判した。

「歴史と文学」に関して、中村は杉浦明平の「歴史文学ともなれば、歴史時代の完全な再現は不可能であるとしても、歴史学の到達したところを尊重し、残存する史料を慎重に取り扱うよう心掛けるべきであろう」との意見に賛成し、小説は作り話だから面白ければ良い、史実に合わないと文句を付ける筋合いはないという考えを批判している。

司馬史観に関しては、「明るい明治」と「暗い昭和」との二項対立史観に問題があるとした。明治と昭和の間にそれほど大きな非連続や断絶を置くことは単純である。それぞれの時代には明るい面もあれば、暗い面もあるし、明治の明るさが昭和の暗さに転じることもあれば、その逆もあるとした。

司馬の大正期評価と絡んで大正デモクラシーの歴史的意義及び司馬の明治憲法観と天皇観も扱った。

イ　コメントペーパーから

㉕日露戦争について詳しく知らなかったので、深く知ることができて良かった。（多数）
㉖司馬遼太郎の著作について、歴史学の観点で批判するという、今回の授業内容はとても興味深かった。司馬がその著作の中で多くの資料を参考にしたという話は聞いていたが、その資料の信憑性や誤読に対する批判については考えたこともなく、なるほどと思う部分が多かった。

㉗史実に対する姿勢への疑問を持つことも一つの読み方だし、リアリティを求めながらも、誇張された表現を楽しむのも一つの読み方だと思う。
㉘司馬遼太郎の「明るい明治と暗い昭和観」は何となく理解できる。大規模な戦争が増え、国内は不安定になってゆく昭和より、開国しどんどん新しい文化が入り発展へと向かった明治の方が明るいと考えるのは当然のように思える。
㉙司馬は天皇の位置は空に似ているといっていて、最初の授業とつながっていて面白かった。（多数）
㉚自分は中学生の頃から歴史が好きでなかった。大学生になり、初めて歴史の講義を受けているが、サッパリわからない。やはりあまり好きでないと分かった。歴史を学ぶとどのような良いことがあるのか。

ウ　ベストアンサー

司馬遼太郎は小説家であるので、「事実に拘束されることが百パーセントにちかい」ことはないと思う。小説を普段から読んでいるので、作者がものすごく取材を重ね資料集めにも何年もかけていることは知っているが、それでも作品の中でストーリーがあるものになってしまうと、いくらか事実と異なったり、過剰表現があったりするのは当然だと思う。だが、それは小説と言い切って欲しいし、司馬氏の考えでレポートを提出したら、歴史学の分野では認めてもらえないであろう。司馬は小説家でありながら「事実にちかい」と断言してしまったから、研究者から批判が集まったのだと考える。日本史を学ぶ者として歴史小説の扱い方には気をつけねばならないと思ったし、史料批判は欠かさないようにしようと思う。

エ　分析

今回の授業では、日露戦争について、旅順港閉塞作戦、旅順攻略戦、日本海海戦を扱ったほか、バルチック艦隊、ロジェストウェンスキー提督、レーニンの日露戦争観等、露西亜側の事情まで詳しく見たので、㉕のコメントにあるように、これまで学んだことのない歴史について知ることができたという感想が多数寄せられた。

㉖のコメントは、中村氏の見解に共鳴する内容である。

一方、㉗のようなコメントも多かった、大切なのは、ベストアンサーに記されているように、歴史学研究と歴史小説の違いの押さえが根本になければならないということである。加えて、「歴史そのままと歴史離れ」の議論は、明治の頃からあるが、歴史小説は通常の小説とは異なり、実際の歴史に基づいて描くことが必要である点も忘れてはならない。

㉚のコメントについては、次回（第 10 回）の授業の冒頭で取り扱うこととした。本授業にとって、重要な質問であるので、おそまきながら、加藤陽子の著書 (1) の一節を資料提示し、質問に答えることとした。資料の内容は次のとおりである

長野県は戦時中満州への開拓移民が多かった。村々では、国や県の推進する移民の募集に積極的に応募するというよりも、村が助成金をもらうことで、応募させられてしまうのであった。結果的に、引き上げの過程で多くの犠牲者を出すことになった。しかし、見識のある指導者もいて、助成金で村人の生命に関わる問題を容易に扱おうとする国や県のやり方を批判し、移民に反対した。先の見通しのきく賢明な人物もいたのである。これは、歴史の必然に対して、個人の資質がいかに大きな影響を持つかを語っている。

この内容について、学生からは次のようなコメントが寄せられた。
㉛私も理系で、高校で歴史を学ぶ機会も少なく、余り興味をもつこともなかった。だから「歴史を学ぶと、どのような良いことがあるか？」という質問に対し、非常に共感した。その回答はとても納得できるものであった。過去と現在を結びつけるように歴史を学んできていれば、歴史を好きになっていたかもしれない。
㉜授業の初めに、歴史を学ぶ意味を考えたことで、その後の講義を聞く姿勢を変えることができて良かった。過去を学ぶことが未来を考えていくことにつながると感じた。

この質問と回答については、上記をはじめ多くのコメントが寄せられ、提示した資料は第 10 回で扱う昭和の時代のものであり、昭和史の理解にもつながった。

歴史に関する学生の受け止めに関しては、第１回のコメント③のような「事実を整理するだけ」という意識があり、その後も同様のコメントがあった。そこで、歴史を学ぶ意義と絡めて、増田四郎の著書 (2) から次の一節も示した。
「ほとんど史実というものは際限なく無数であって、どのようにこれを再構成し、どのようにこれを理解するかということは、結局は歴史を研究するわたくしたち自身が、どのような問題を緊要にして切実な問題と感じているかということによって決定すると思う。つまり、われわれ自身が現代的な関心に照らして問題を抱かない限り、史実そのものは無数で、史料というものは単に血も肉もない索漠とした古文書や遺物の集積にすぎないということになるであろう。」（傍点著者）

増田の著書の提示もまた、現代人が歴史を学ぶ意義について理解を深めることにつながったと考える。

なお、第 11 回の授業では、松本健一『司馬遼太郎が発見した日本　『街道をゆく』を読み解く』（朝日新聞出版）を取り上げ、第９回との関連で、「歴史と文学」について改めて考察することとした。コメントペーパーには、
㉝前々回、司馬氏を取り上げたとき、批判的な内容であったため、あまりよい印象は持たなかったが、今回

でそれが変わった。彼は歴史と地理をしっかり結びつけ、様々な分野の思想を持ち、自らの基準での美しさの考えがある。
㉞前々回の授業で、司馬遼太郎の『坂の上の雲』を取り上げ、検証したのはとても良かった。おかげで、今回の『街道をゆく』を批判的に見ることができた。私にとっては、司馬は懐古主義が少し過ぎるように感じた。彼が嘆いている、平戸城の下のコンクリート会館や松平郷の高月院のそばの天下祭りの旗は、地元住民にとっては、街起こしをしたり、地域の歴史を伝えたりするもので、悲しむものではない。確かに日本の歴史を感じさせる建物は美しいが、現在はそれらを残しつつも、積極的に活用していく段階にあると思う。

等の意見が寄せられた。２回の授業で司馬遼太郎の著作を扱ったことは、「歴史と文化」の授業にとって効果的であったと考える。

２－１－５．　第 12 回（12 月 20 日　出席者 93 名）

取り上げた書籍は、塩野七生『痛快！ローマ学』（集英社インターナショナル）。

ア　授業の概要

「はじめに」のところで、塩野さんの学生の頃のエピソードが語られる。先生たちが教えることをそのまま信じない学生で、「なぜか」、「どういう状態で」の二つの説明を求めた。その中で、古代ローマがギリシアの模倣だけで 1000 年も続くわけはないという思いを、その後も持ち続けた。

９章からなる本書から、まず「第１章　なぜ今、「古代ローマ」なのか」を取り上げた。歴史には人類が経験してきた全てのことが入っている。そんな歴史が面白くないはずがない。特に古代ローマの歴史は面白い。西ローマ帝国が滅亡後、ヨーロッパ人はローマのことを忘れたが、ルネサンス時代の人々は、「人間とは何か」を知る最高のヒントがローマ帝国にあると考えた。そこから学ぶことが多い。ローマ帝国は、民族の違い、宗教の違いを認めた上で、それらすべてを包み込む普遍帝国であった。しかも、失敗を認め、改革を行う勇気を失わなかった。勝者は決して最初から勝者であったわけではない。無数の敗北や失敗を乗り越えてきたから、勝者として生き残れたのである。

次に、「第９章　ローマから日本が見える」を取り上げた。ローマ人はリストラに長けた民族で、再構成に何度も成功している。ローマ人の政治改革は、王政から共和政へ、共和政の改革、帝政の樹立の３回である。ローマ人にとって、政治システムはローマ街道と同じく、常にメインテナンスすべきものであった。こうした軌道修正がローマ帝国存続の理由である。改革が必要となる理由について、「どんなに悪い事例とさえていることでも、それが始められたそもそものきっかけは立派なものであった」というカエサルの言葉が紹介されている。現代日本の問題も最初から悪であったのではない。いつどこで、善意が悪意へ転換したのか、考えなければならない。ローマ帝国は自由を圧殺した皇帝の専制国家ではない。皇帝の地位は元老院やローマ市民の支持無くしてはあり得ず、人々は「パクス・ロマーナ」の自由を謳歌した。日本人はローマ人と似た多神教の民族で、一神教のキリスト教の影響をほとんど受けていない。その意味で、日本人はローマ史から多くの教訓を得ることができる。

最後に、「特別付録　英雄たちの通信簿―指導者に求められる５つの資質とは」を取り上げた。指導者に求められる資質は、知力、説得力、肉体上の耐久力、自己制御の能力、持続する意志である。この５つの資質を踏まえ、塩野氏はローマの偉人たちの通信簿を作った。歴史を学ぶ醍醐味の一つは人物論にあるが、塩野氏の人物評価は興味深い。５つとも 100 点満点はカエサルだけであり、アレクサンダーには意外な弱点があった。５つの能力は目的完遂に集約でき、リーダーに求められるのは、結果を出すことで、人格の円満さや徳性は関係ない。

イ　コメントペーパーから

㉟今日の授業は、歴史というよりローマ帝国はどういう方針で築き上げていったのかが学習できたため、とても面白かった。
㊱歴史的な事実に沿ったものではなかったので、理解することが少し難しく感じた。
㊲高校の世界史 B でローマの政治の移り変わりを学習したが、今日その意義がようやく分かった。ローマのように民族や宗教の違いも受け入れて、様々な人々を統合する帝国は、一見治めるのが大変そうに見えるが、実はどんな人にも市民権を与えるなどの寛容さで、人々からの不満を買わない方が長く繁栄するということが分かり、法を重視することで、様々な民族・宗教の人々がいる、治めにくい状況を超えられたのだと思った。
㊳塩野さんの学生時代の話に共感した。疑問をぶつける学生に嫌がりもせず、詳しく説明してくれた教師たちがいたからこそ、筆者の今の姿につながると思う。
㊴考えさせるような印象的な言葉が多かった。
㊵現代日本の混迷を抜け出すヒントがあると思った。
㊶中空構造の日本と強力なリーダーの必要性は対立しているが、この二つを比較して考えてみると、日本に必要なリーダー像が出てくるように思う。
㊷人格の円満さや徳性がある方が、みんなから信頼されると思う。（多数）

ウ　ベストアンサー

私はこれまで中学・高校と歴史の授業がとにかく嫌いであった。なぜなら、何千年・何百年も前のことを学んでも何の意味もないと考えていて、ただテストで点数を取るために暗記するだけのものだと思っていたからだ。しかし、今日の講義資料の初め

に書かれていた「歴史とは人間である」「『歴史が苦手』というのは、『人間が苦手』ということになる」との言葉はなるほどと思った。例えば、一つの国を取り上げても、その国が繁栄した時代、衰退した時代と、それぞれあるだろうが、そのどちらの時代も全ては人間によって築き上げられたもので、勝手に時間とともに変化している訳ではないし、一つの時代を取り上げても社会構造に影響を与えるのも人間、反乱を起こすのも人間、反乱を鎮めるのも人間というように、歴史＝人間と考えられる。また、ローマ帝国・ローマ人について、こんなにも詳しく学んだのは、今日が初めてだったが、様々な人たちがローマのためにローマの独自の方法で試行錯誤を繰り返しながら歴史を作り上げていったことがよく分かった。日本とローマは、文化・習慣などが違うから、ローマをそのままねすれば良いとは全く思わないが、共通点などを学んで、日本に必要なことを考えていけばいいと感じた。

エ　分析

㉟と㊱のコメントは、表裏の関係にある。本時で取り上げた内容は、歴史の流れを、出来事に即してたどるというものではなく、古代ローマの建国の理念に着目し、その推移と特質を考えるものである。㊲のコメントは、㉟のコメントの具体的な中身を示している。

㊳のコメントからは、本書の「はじめに」の内容が学生に強いインパクトを与えたことがうかがわれる。その内容は、同時に、ほかでもなく学生を指導する教師に求められる姿勢も示している。

㊴については、カエサルの言葉を、私なりに言い換えた「失敗への道は善意で舗装されている」が、大きな反響を呼び起こした。別に「何とも不思議な気持ちにさせられた」「考えさせられる言葉だと感じた」等の意見が多数寄せられた。

塩野氏の「リーダーに求められるのは、結果を出すことで、人格の円満さや徳性は関係ない」という言葉も、学生にとって考えさせられる言葉の一つだった。但し、学生からのコメントは㊷の内容が多かった。日本人らしい捉え方であると考える。

㊵のコメントの通り、本書から現代日本が学ぶべき内容が多いことを、学生は学習したと思う。

㊶のコメントは、初回の授業で問題提起した「中空構造日本」の認識が、本授業の全体を通して、基調低音のように学生の頭に刻み込まれていたことを示しており、日本における組織の在り方は、本授業の巧まざるテーマに図らずもなっていた。

ベストアンサーは、「歴史を学ぶとどのような良いことがあるのか」の学習同様、本時の内容もまた、歴史を学ぶ意味の理解に有意義であったことを物語っている。

２－１－６．　第 15 回（１月 31 日　出席者 89 名）

取り上げた書籍は、羽田正『新しい世界史へ』（岩波書店）。

ア　授業の概要

現在の世界史は、二つの前提の上に成り立っている。一つは、世界は異なった複数の部分から形成されており、それぞれが異なった歴史を持っていること、もう一つは、複数の部分のうちで、ヨーロッパ文明とそこから生まれた諸国家が他よりも優位にあり、実質的な世界史を動かしてきたことである。そのうえで、世界史とは、異なったいくつかの文明世界、ないし国家の時系列に沿った歴史を束にして、全体をひもで縛ったようなものとして理解される。

各国で教えられる世界史は、各国の歴史に重点が置かれ、互いにかなり異なった内容となっている。

現在、世界全体を視野に収めて、数多くの難問を解決するためには、手を取り合って行動することが必要であり、新しい世界史は、国民ごとの世界史ではなく、地球社会の世界史、地球市民のための世界史でなければならない。

羽田が構想する新しい世界史の方向は、世界の見取り図を描く、時系列史にこだわらない、横一つにつなぐ歴史を意識する、の３点である。

世界の見取り図を描くについては、ある時代に人間が作り上げた集団の秩序とそれを保護する政治の仕組み、特徴的な文化を一つひとつ取り出して解説する。次に人間集団ごとの特徴と各集団を超えた共通点、さらには集団間の影響関係を論ずるという手順で進める。

見取り図上の個々の人間集団、あるいは国全体は、どのように変化してゆくのかが従来の世界史の方法であったが、新しい世界史では、時系列的な解釈にはこだわらない。ある時代の見取り図ができたら、それでよく、又任意の時代について見取り図を描く。過去から現在までの見取り図を積み重ねれば、世界史になる。しかし、これらの図を時系列的に理解しない。重要なのは、各時代の見取り図を参考にして、現代世界の特徴と構造を理解すること、又その逆である。

横につなぐ歴史を意識するについては、世界各地の人々が生産、流通、消費の各分野で互いに深い関わり合いを持っており、相互に影響を与え合っていたことを、具体的に説明している。

イ　コメントペーパーから

㊸今回は歴史のある場面を取り上げたというより、歴史教育についての内容であったため、とても興味深かった。学習指導要領を引っ張ってきたり、他国の教科書の内容と比較したりする検討方法は良いと思った。世界史が万国共通のものになったら最高だと思う。「勝者」の歴史から「地球人」の歴史になって欲しい。

㊹特定の地域だけを中心として考えると、その中心がしたことが正義と思われてしまう。私は、新しい世界史の考えを支持し、広い視野で世界を見ることによって、歴史の正と負を今一度見つめ直すことが必要では

ないかと思う。
㊺歴史は時系列に並んだ事実の積み重ねだと思っていたので、ある時代の見取り図を描いたらそれで良しという考えは、なかなかなじみにくいものだとも感じた。
㊻新しい世界史は「時系列にこだわらない」という点がなかなか理解しがたく、想像できなかった。しかし、物を中心とした横のつながりを広く見渡した視点に驚き、少し納得することができた。
㊼歴史を横で見る面白さを感じた。（多数）
㊽この授業を通して、いろいろな国の文化や著者の主張に触れることができた。自分の固まった思考をほぐす貴重な刺激となった。
㊾授業内容だけでなく、先生の考え方や物事の捉え方に学ぶことがたくさんあった時間だった。これも“生活の質が仕事の質を規定する”ということである。
㊿10 月から 1 月まで、4ヶ月間、日本から世界まで様々な歴史や文化を学んできたが、今まで歴史を取ってこなかった私にとって、新しい発見ばかりであった。

ウ　ベストアンサー

私は高校の時に日本史選択だったが、高校２年の時は世界史 B も途中まで受けた。世界史の授業は、ローマ史や中国史など、地域的に進められていたために、その時代に他の国や地域では何が起こっているのかが分かりにくかった。世界史の授業だけで知識を付けるとなると、ローマ史はローマ史としての単体の歴史のように感じて、ローマも他の地域とのつながりはあったはずなのに、そういった感覚が身につかなくなってしまうと思う。私が習った先生は、時々「この出来事とは日本で言う〇〇時代のとき」や「この時代は中国では〇〇朝が生まれた」などと、少し横のつながりを説明してくれた。そうすると、全く別々の歴史だと思っていたのが、相互の関係によって成り立つものだというのが分かった。特にシルクロードによってもたらされた宗教や貿易品等に注目すると、文化や文明は決してその一つの国や地域だけでは形成することができないということが分かりやすいと思う。グローバル化が進む時代に生きようとする、これからの子どもたちは特に世界が一つであることを前提にした世界史を学ぶ必要があると思った。

エ　分析

㊸のコメントにあるように、今回は最終回であるので、世界史の在り方及び歴史教育の在り方について考察した。教員志望の者が多いので、効果的であった。

㊹は、羽田氏の、ヨーロッパ中心史観を超えた、新しい世界史の考え方を支持している。但し、㊺に示されているとおり、「ある時代の見取り図を描いたらそれでよし」という羽田氏の考えは理解しずらいという学生が多かった。そのことは、「時系列にこだわらない」という点が理解しずらいことと連動している。現代的関心から過去を振り返ることを重視する羽田氏の主張の理解が深まらなかったことに起因すると考えられる。

㊼に示されているように、「横につなぐ」については、多くの学生が支持した。

本時は最終回であったので、授業全体に関するコメントも多数寄せられた。

㊽は、日本や世界の歴史と文化の学習を通して、それぞれの著者の考えに触れ、刺激を受けたことを語っている

㊾は、歴史や文化のみならず、物事の捉え方について学びがあったということである。第14.回では、授業も終盤を迎えたので、本題から少し離れ、教師を志望する学生が多いことから、学生にぜひ伝えたいことについても扱った。使用したのは、高井良健一「教師の経験世界―学び続ける教師」(3)の一節である。「学校に十二時間滞在しながらも学びのない生活を送っている教師と、学校には九時間の滞在でも、図書館、資料館、研究サークル、地域の活動など学びの場所やネットワークを持っている教師とでは、人間としての魅力も、授業の深さも、大きな差が出ることは明白である。」との一文は、教員志望でない学生にも、職業人の在り方を考える上で、大きな衝撃を与えた。

㊿の他にも、本授業を通して多くの新しい発見があったというコメントが多く寄せられており、本授業の一つの成果と言えるのではないか。「授業で取り上げられ、興味を持った本が何冊かあるので、空いているときに読んでいきたい。」というように、授業後も学び続ける学習も期待される。

２－２．　課題レポートの図書

課題は、授業で取り上げた書籍に関するレポートで、授業の内容を踏まえて、その書籍を読んで考えたことをまとめるものである。分量は、1800～2200 字とした。

学生が読んだ書籍は次の表のとおりである。

表５　学生がレポート作成で読んだ書籍

回	書　籍	学生
1	ガイダンス・河合隼雄『中空構造日本の深層』（中央公論新社）	１１
2	上山春平『埋もれた巨像　国家論の試み』（岩波書店）	1
3	梅原猛『隠された十字架　―法隆寺論―』（新潮社）	5
4	網野善彦『中世再考　列島の地域と社会』（日本エディタースクール出版部）	3
5	黒田日出男『増補　絵画史料で歴史を読む』（筑摩書房）	4
6	今谷明『室町の王権』（中央公論新社）	4
7	笠谷和比古『士（サムライ）の思想　日本型組織と個人の自立』（岩波書店）	6
8	長谷川宏『日本精神史　下』（講談社）	5
9	中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』（岩波書店）	7

10	保阪正康『昭和史のかたち』（岩波書店）	6
11	松本建一『司馬遼太郎が発見した日本　『街道をゆく』を読み解く』（朝日新聞出版）	4
12	塩野七生『痛快！ローマ学』（集英社インターナショナル）	１２
13	阿部謹也『中世の窓から』（朝日新聞社）	8
14	木村商三郎『ヨーロッパ思索紀行』（日本放送出版協会）	8
15	羽田正『新しい世界史へ』（岩波書店）・まとめ	5
	その他	１２

計　１０１名

その他は、取り上げた書籍以外に、授業の中で紹介した書籍も可としたので、そちらを選んだ学生もいたということである。「その他」の中で最も多かったのは、上述の加藤陽子の著書で、５名の学生が選択した。

３．　まとめ

本授業は、毎回異なる書籍を取り上げ、異なったテーマを考察するので、各書籍の選択の適否が問われる。学生が課題レポートの作成のために読んだ上掲の書籍を見ると、適度のバラツキがあり、選ばれなかった書籍は皆無であることから、概ね良好と言えるのではないか。いずれの書籍の内容も、高校までの歴史や文化の授業では扱われていないと推察され、また一般向けに書かれたもので、高度に専門的でないので、大学の教養科目として取り上げるにはふさわしいと考える。

以下、細部について、成果と課題等を記し、まとめとする。

３－１．　成果

ア　中学や高校までの歴史の授業では扱われなかった素材を取り上げたので、「今日の話は今まで聞いたことのない内容で、非常に興味深いと感じた。」（第５回のコメントペーパー）等、授業内容は学生の興味・関心を引くものであった。

イ　毎回扱う書籍（テーマ）が異なるので、読み切りの形であり、受講しやすい。

ウ　毎回、前時のコメントペーパーのまとめ（A４判表裏 1 枚）を配布したので、協同学習の一助となるとともに、授業内容の理解を促進した。回を追う毎に、学生のコメントペーパーのまとめへの関心は高まり、授業開始前に取りに来る学生が多くなった。

エ　最近の若者は海外への関心が薄くなっていると聞くが、本科目のヨーロッパの歴史と文化に関する授業を通して、少し関心を喚起することができた。

オ　学生による授業アンケート調査（各項目 5 点で 84 名の学生が回答）では、「授業に対する評価」（９項目の平均）は 4.07 であり、全般的に良好な結果が得られた。本授業の分析ツールとしたコメントペーパーに関する設問「コメントペーパー、メール、電子掲示板などが活用されていた。」は 4.35 で、項目の中では最も高かった。次が「成績評価の方法と基準が明確に示されていた。」で 4.25、「この授業を受けて、新しい知識や考え方、技術が身に付いた」が 4.24 であった。「授業の内容満足度」は 4.11、「授業に対する総合満足度」は 4.13 であった。

３－２．　課題

ア　理学部・農学部の学生は、世界史は履修したが、日本史は履修していない者が多く、知識は中学校段階にとどまっている。したがって、内容の取扱いには留意を要する。素材を、日本史ではなく、世界史を中心に構成することも対応案として考えられる。

イ　成果のイの反面として、毎回テーマが異なるので、内容に発展性や深まりを欠いた。ただし、若干は通しのテーマを意識した。古代の３回で言えば、７・８世紀において藤原氏が果たした役割が共通部分であった。また、1 回、７回、９回では、日本の組織の在り方について考えさせる内容を含めた。各時代等の核の内容を踏まえた意味ある構成が課題である。

ウ　扱う時代に偏りが見られた。古代では平安時代、中世では鎌倉時代を扱うことができなかった。

エ　世界史は、ヨーロッパ史のみであり、アジアをはじめ他の地域の歴史と文化を扱うことも必要である。

オ　「歴史を学ぶ意味」については、最初に扱いたい。

カ　アクティブ・ラーニングの手法を導入する。

キ　学生の自主的学習を促す方策を考える。

ク　上述のアンケート調査では、「この授業の内容を理解することができた」は 3.80 で、相対的にこの項目の評価が最も低い。②のコメントペーパーにあった「用語とか内容が難しく、何となくしか分からなかった。歴史における一般常識が無に近いので、なかなか頭に入ってこなかった。」等の意見を反映するものと考えられる。また、「授業スキルの満足度」に関しても 3.93 と低い点は大きな課題である。

本実践報告は、学生の授業後のコメントペーパーを主な分析対象としたので、ある学生のコメントを引用し、むすびとする。

「歴史を勉強するのは本当に楽しい。日本史だからとか、世界史だからとかではなく、高校時代とは違って、歴史が多面的な立体であると感じる。それに伴って、昔抱いていた無機質なイメージはなく、人生に新たな価値を与えてくれるものだと思う。」（第 10 回のコメントペーパー）

（注）

1　加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社）

2　増田四郎『都市』（ちくま学芸文庫）

3　佐藤学編『学びの専門家としての教師（岩波講座教育変革への展望　第４巻』（岩波書店）所収